様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22　年　4　月　10　日現在

研究種目：基礎研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19401044
研究課題名（和文）　ペルー山間地域の「その後」－農民社会の動態に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）　Revisit to the Peruvian Andes: Anthropological Studies on the dynamics in the Peasant Societies

研究代表者
加藤　隆浩（KATO TAKAHIRO）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：50185849

研究成果の概要（和文）：
ペルー共和国では、先住民が多く暮らす農村部から都市部への大量移住が 1950 年代に始まった。それに伴い、国の広い部分で漸次的に伝統の拡散現象が生起した。しかも、前世紀末よりグローバル化という問題も出てきた。ただし、これらは、単なる文化の伝播ではなく、地域の社会・文化的状況に適応する形で浸透してきている。その結果、新たな文化の創出だけでなく、既成文化や新たな文化要素のダイナミズムも観察できる。しかし、単にこうした社会や文化の変化を移住とかグローバル化というような原因に還元して分析することは、ペルーの実態に即していない。なぜならば、報告者が、これまで観察してきたところによれば、一つの社会・文化的変数が同じ結果を引き起こすとは限らず、また、逆に、異なる変数が、同じ結果を生むこともある。本研究は、社会・文化的変化とは何かと常に念頭に置き、実証的研究を心掛け、その結果、ペルーにおいて過去 30 から 40 年に必ずしもすべての社会・文化的側面で構造的な変化が生起しているとは言えないことが実証できた。

研究成果の概要（英文）：
In Peru, it was 1950's that the enormous migration of the indigenous people in the peasant communities to the urban area broke out. This human flow has caused gradually the diffusion of traditional culture in the vast area in the country. Besides, it has been exposed to the accelerating globalization since the second half of the last century. These phenomena, however, have penetrated to the area not only as a simple cultural diffusion but also in a form of adaptation to the local socio-cultural situation. As a result, we can observe with ease the new culture creation as well as the dynamism of the existing and new cultural elements in the local societies. But it is hasty to analyze these socio-cultural changes merely reducing into the overt factors such as migration or globalization, because the issue is more complicated. In facts, according to our field research and inquiries, a certain socio-cultural variable does not always bring out the same result, nor , on the contrary, different variables could cause the similar or even the same result, too. In this project we have carried out the inductive and positivist studies considering what the socio-cultural changes are, to prove that there have been little change in most of aspects in the socio-cultural structure during these thirty or forty years in Peru.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2008 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009 年度	2,200,000	660,000	2,860,000

年度			
年度			
総　計	8,400,000	2,520,000	10,920,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：ペルー、農民社会、動態、文化人類学、再訪

１．研究開始当初の背景

本研究に携わった研究者８名のうち７名は1983 年より調査開始年次まで中央アンデスを対象とした地域研究を実施し、そのうち1994～2002 年の３期８年間の調査で、ペルーの国民文化の形成、その表出形態の一つとしての政治行動に焦点を当て地方都市のアンデス伝統文化、地域アイデンティティとの関係を分析してきた。その結果、「近代化」「グローバル化」が必ずしも国家・都市から地方へ一方的に進行するのではなく、地方の伝統文化の再評価として「アンデス化」の昂進も顕著に認められ、国民文化が両者の相互干渉を通じ形成される様相を明らかにしていた。しかし、そうした課題に取り組み、都市や国家あるいはグローバルな次元で生起する諸現象に目を奪われているうちに、研究の原点であった村落に社会・文化的構造の再編を迫るような決定的な変化が生じ、その変化の実態は、1983 年にはじめて共同調査を実施した際の記録、さらに遡れば 1960 年代、70 年代に当該地域の村落に住み込み文化人類学的調査を試みた申請者等の当時のフィールドノートに照らすと社会・文化のさまざまな側面で変貌ぶりが目についた。そこで、地方（=村落）のアンデス文化と近代化との相互干渉作用の結果として「国民文化」の形成や「アンデス文化」の昂進、「グローバル化」を分析してきたこれまでの方法論では、干渉作用の一方の極に重大な変化が生じているわけだから、何らかの見直しを迫られることになった。したがって本研究では、社会・文化的変化とは何かを念頭に置きながら問題のもととなっている村落の動態の相に立ちかえり、その変動がどのような実態を呈しているのかの検討からはじめなければならないと考えた。実際そうした考察は、「都市」「国家統合」「グローバル化」という視点からは抜け落ちてしまう傾向にあり、村落の「その後」を実証的に把握しておくことは、民族誌的定点観測の重要性からしてもより基本的な課題として不可欠なことと考えた。

２．研究の目的

以上の観点から、本研究の目的は、以下の 5 点に絞られた。

(1) 本研究に参加する研究者が実施した 60、70 年代のデータをゼロ・ポイント（基準点）として、その後、ペルー各地域でどのような相でいかなる変化が生じているかを現地調査、文献資料等も利用しながら検証する。

(2) 地域の変化を見極めながら、連続性、持続性に注目し、それがどのような社会・文化的脈絡で見られ、またそれを支えるメカニズムがどのようなものかを検討する。

(3) 8 地域の変化を相互に比較し、ペルー全体で生起している変化と、地域固有の変化とに大別し、変化の地域性を抽出する。

(4) (1)～(3)を考察する過程で、ゼロ・ポイントから現在までのペルーの社会・文化変化に関する包括的に検討し、これまで、ややもすると同じペルーの事例を扱いながらも、時代や地域が異なると敬遠されがちであった多くの研究を有機的に位置づけ整理できるような参照の枠組を構築する。

３．研究の方法

本研究はペルーの８地域の変化のあり様を相互に比較し、その地域性を洗い出すことを目的とするが、変化のすべてを検討することはできない。そこで、申請者等がかつて調査したゼロ・ポイント地域が呈する特殊性に応じ､以下の８要素に限定して研究をすすめた。そうすることにより、これまで「都市化」「国民統合」「グローバル化」といったマクロの視点に立った説明に、ミクロの側から検証する基盤を築くことができると考えた。

(1) ゲリラ集団センデロ・ルミノソの社会的影響　(2) プロテスタントの出現と改宗、及びその社会・経済的影響　(3) 道路網整備のインパクト　(4) 開発プロジェクトの功罪　(5) 考古学的発掘と観光の促進　(6) 巡礼

ブームの到来と人口移動　(7) 獣毛生産と国際市場における価格変動　(8) インディヘニスモの生成とカルチュラル・ブローカーとしての巡回芝居

上記の要素は、各地域の変化の主要因となっているものではあるが、ペルー全体から見ると互いに重複しあうこともある。したがって、個別的な検討を加えるだけでは十分ではなく、相互の連関、また必要に応じて上記には出ていない他の要素も射程にいれ全貌を見通すようにした。

４．研究成果

この 50 年間におけるペルー農村部の変化は、国内における人口移動である。今回の調査のどの地点でも、若者を中心として多くの人びとが山間部の村落から出てしまっている。その最大の原因は、1950 年代の世界的な好景気による雇用の創出、また 1968 年に始まった軍事政権による農地改革の結果、農村が疲弊し、多くの地方の住民がリマを主とした海岸地方へと移住している。そのうえ 1980 年代の反政府暴力集団「輝く道（センデロ・ルミノソ)」によるテロが各地に広がったこと、ほぼ同時であった麻薬取引が野放し状態になったことによる社会不安などが、この動きに輪をかけている。以上の点は、本研究で調査したどの村落においても共通して言えることである。

ただしこの現象は、人口移動だけにとどまらない。先住民が多く暮らす山間の農村部から海岸地方の都市部への人口移動は、都市部周辺で農村から持ち込まれた伝統文化を息づかせ、ペルーの広い部分で伝統の拡散現象が生起させた。これは、単なる文化の伝播ではなく、地域の社会・文化的状況に適応する形で変化を遂げてきている。その結果、新たな文化の創出だけでなく、既成文化を含めた文化要素のダイナミズムも観察できることになる。しかも、近年、地球規模で発生しているグローバル化、「グローカル」化という問題も出てくる。とはいえ、本研究を通して、こうした社会や文化の変化を単に移住とかグローバル化というような原因に還元して分析することはペルーの実態に即していないことが分かった。なぜなら、報告者らがこれまで観察してきたところによれば、一つの社会・文化的変数が同じ結果を引き起こすとは限らず、また、逆に、異なる変数が、同じ結果を生むこともあるからである。本研究は、社会・文化的変化とは何かと常に念頭に置き、実証的研究を心掛けてきた。

眞鍋周三はプーノ県に焦点を合わせ「垂直統御」学説に基づくアンデスの物資補完関係のモデルをインカ時代や植民地時代初期のルパカ（＝チュクィート地方）(現プーノ県) をモデルとして分析すると、アンデス高地にあるこの地方では南米ラクダ科動物が富を計測するさいの重要な指標であったことが分かる。そこでまず、現在この地域を代表する産業である獣毛産業の実情を植民地時代におけるラクダ科動物の規模や実態などと比較して考察した。その結果、植民地時代から共和国へと時代が進むにつれてラクダ科動物に関連する商品価値も、国内外の社会経済的変化に伴い大きく変容を遂げつつ現在に至っていることがわかった。次に、DESCO（開発研究推進センター）や CONACS（南米ラクダ科動物国立審議会)、PECSA（アンデス南米ラクダ科動物特別計画研究所）などの機関がもっている諸資料の分析を行うとともに、プーノ県の地方自治体をはじめ関係機関に出向き、関係者から聞き取り調査を行うことで、近年のプーノ県における獣毛、とりわけアルパカ獣毛産業の動向や社会変化について精査・考察した。また、ペルーの村落のうちラクダ科動物を欠いている状況を見て、逆にその動物のもつ意味を探るため、セルバ地域に注目し、「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察」という新たなテーマに取り組んだ。

高橋博幸は民衆教育・啓蒙を目的として 1930 年代から 60 年代までクスコ地方の村落を巡回し、インディヘニスモの生成とカルチュラル・ブローカーとしての役割を担ったという移動芝居小屋を調査した。この演劇の性格上、活字としてのテキストは残されていない。人々の記憶にもはっきりとした痕跡をとどめていない。そこでまず 80 年代から今日までリマを拠点に先住民文化の復権と擁護のための演劇活動を全国展開しているグループ「Yuyachkani」を取り上げ、グループのメンバーとのインタビュー、実際の上演風景の観察、あるいはビデオ・DVD による過去の上演作品の分析を行い、彼らの活動のなかに先住民文化に対する認識や教育思想がどのように内面化されているかの考察を試みた。その過程のなかで、ケチュア文化の要素としてのインカ劇の伝統についての知見が必要となり、その後スペイン征服前後のインカ劇の伝統についての研究に着手した。そのため、16・17 世紀のペルーの舞台を席巻したコメディア、イエズス会劇、聖体劇というスペイン黄金世紀の演劇と新世界生まれの、しかもインディオ出自の劇作家・聖職者によるスペイ

ン語と土着語で書かれた演劇との比較研究をし、文字として残されていないインカ劇の伝統の痕跡を探った。また、クスコ地方とペルー北部とでは社会・文化的状況が異なるので、後者の例としてカハマルカ市でも調査を実施した。

加藤隆浩は、現地研究者M.ソラーノと、マンタロ谷における道路の敷設がアコ村の地場産業の一時的興隆とその衰退の両方を引き起こすという現象を聞き取り調査した。1980年代初頭、アコは、首都リマにつながるハウハ―ワンカーヨ間の幹線道路から外れ、村は、常にぬかるんだ道を低速で大きく迂回して時々入ってくる小型トラック以外に、近隣と結ぶ交通手段は徒歩しかなかった。したがって、村特産の陶器は、基本的には村落内での消費に回されていた。ところで、2000年に幹線道路に面したミトとアコとを結ぶ道路が整備され、車も入り、かつては、4～5時間かけて徒歩で往来していた状況は一転した。このことにより、アコは、従来切り離されていた市場のネットワークの中に繰りこまれることになり、地場産業の土器つくりが興隆した。また村では、トウモロコシ、ジャガイモの生産もあり、余剰を市場に出すことができ、数年活況を見せた。しかし標高4000mに近い環境の中で、都市で高値で売買される換金作物を栽培することは困難であり、トウモロコシ、ジャガイモなど「ありふれた」作物は仲買人に買いたたかれることが多く、村人の農業への期待は著しく低下した。一方、土器つくりは、壺、皿といった日用品が作られていたが値段は安く、安価なプラスチック製品の流入で、期待されたほどの利益を生まなかった。都市で売れるようにと村の祭りの風景をかたどった置物の試作品が作られたりもしたが、壊れやすく、重い土器に消費者は手をのばさず、現在は、クスコやアヤクチョの民芸品の模倣に自らのアイデアを若干加えながらごく限られた職人（の卵）の努力が続いている。道路が開通すれば、村落が変わる、といった意識は、アコ人にはあったが、現在は、彼らの想いは空回りしている状況である。また、J.ソラーノは、道路網の発達とそれによって活発となったアコ村のプロテスタントの活動についての基礎データを蒐集した。

藤井龍彦は、「ワヌコの住民にとって東京大学アンデス地帯学術調査団が調査したコトシュ遺跡とは何か」「コトシュ遺跡が地域社会とどのように関わってきたか」をテーマとし主に聞き取りによる現地調査を進めた。これまで蒐集したデータの解析から、ワヌコ市民は、一般にコトシュ遺跡を校外授業の一環として訪れており知ってはいるが、多くの人は、観光ルートから外れ、実利とは無縁の遺跡にそれ以上の関心も興味も持っていないことが分かった。但し、コトシュ遺跡については、「交差した手」は黄金で作られており、それを日本かリマへ持ち去られたという噂話がついてまわる。この「交差した手」の「都市」伝説は、いくつかのヴァージョンがあるが、その背景にあるのは、1966年に最後の調査が行われてからの保存処置の無策に起因する。近年、やっと遺跡保存の動きが芽生え、東大調査団やコトシュの発掘についてスペイン語で書かれたものがほとんどないため、今回は市役所のホールで「コトシュの発掘と日本の調査団」というタイトルで、大貫良夫・東京大学名誉教授の講演会を開催し、ワヌコ大学の学生を中心とした200名以上の人に、「交叉した手」の真相を説明してもらった。

友枝啓泰は、アヤクチョ県での政治暴力が村落の政治に与えた影響についての資料を集めた。その後、ミリョネスと共に、巡礼地トゥクメの興隆がどのような形で生起したかを調査した。そこで、信者が奉納し、信仰内容と深くかかわるダンスに注目し、その地域で開催される祭典にどのようなダンスが参加したかというその変化を調べた。その結果、ネグリートと呼ばれる黒人の仮面をかぶり、彼らの所作を模した踊りが健康、病気と結びつき、それが特定の十字架と関わることが判明した。十字架信仰は、ペルーのほぼ全土で、1950年代つまりアンデス高地から都市への移住が開始されることから急激に拡大してきたことが分かっているので、ネグリートの踊りの浸透も 50 年代からということが予想できた。そこで、ダンスと十字架信仰、また都市移住とどのように関わるかについて調べる段階にきているが、踊りと病気、地域性の破綻という要素が、遠く 16 世紀中葉の「タキ・オンコイ」に鮮明に見られることに注目し、それを検証しようとした。今後は、それらの要素の連関がもつ社会・文化的意味を探る必要があるとの結論を得た。

カプソリは、アンカシュ県・ポマバンバの「インカの死」と題する民衆芸能の変化を探求した。彼はまず現代の民衆劇の台本を、上演の実態と突き合わせて再構成した。字句は、彼が見たことのある 1960 年代のそれと大きく変化してはいないが、芸能を上演する状況は大きく変化していることが分かった。かつては、観客が村落住民あるいはせいぜい近隣住民に限られていたが、現在では都市住民や

外国人が観光としてやってくるまでになっている。その結果、劇の上演と商業主義とが結び付き、加えて、上演者の一部が、都市住民から選ばれその祭典のために一定の額のお金を持って帰郷するので、劇の仕掛けは大掛かりとなり、目を引くようになってきている。しかも、ダンスの種類、参加者も増え、また豪華で派手な衣装が好まれるようになってきている。ただし、一見様変わりし、表面的には大きな変化があるように見えるが、このインカ劇がもともと担っていた「被征服者の視点」は健在であり、観客はむしろそれを求めてもいる。だとすれば、かつては、村人だけでそうしたイデオロギーを再確認するだけであったが、それが地域を越えた脈絡の中でステレオタイプ化したイデオロギーが一方的に再強化される可能性もある。

オルティスは、アンデス的世界観として伝統的に維持されてきた双分観が、40 年前と比べてワロチリ他海岸地域の各村落でどのように変化しているかをジェンダーに注目して比較調査した。その際、日常生活の分業と祭典で見られる芸能の両面から検証した。

日常生活での役割分担は、賃金労働の浸透で、男女とも家の外で労働する事例も多数見ることができるが、家庭に戻ってくると、炊事、洗濯、育児は相変わらず女性の仕事となっており、以前に比して女性の労働が過重になっている状況が明らかになった。しかし、祭典でしばしば行われる踊り―ここでは、彼らの担うイデオロギーが顕現する場合が多い―を見ると、男女ペアで踊るものが増加していることが分かる。そこで、近年インターネット上で大流行の YouTube を取り上げ、そこで配信される映像を使ってアンデス各地で実施される民族舞踊を分析してみると、男女の葛藤・対立を表現する例がいくつか出てきていることが判明した。これは、社会の中でのジェンダー間の矛盾が、祭典という非日常的開放を背景として噴出していると考えられる。ただし、こうした踊りは、社会的安全弁として一時的なカタルシスを生じさせ、再び日常に回帰していくだけのように見える。その意味で、伝統的ジェンダー観は、行動様式をリジッドに規定し、そうしたダンスの出現も、ジェンダーをめぐるイデオロギーの再強化に取り込まれてしまっている可能性があることが分かった。

最後に、本研究の途上で 2 つの発見があった。1 つは、加藤とカプソリが見つけた 1920 年代にペルー各地の農村社会がどのような状況にあるかを探るために実施された調査アンケート(La Asociación Pro Indigenista)の回答の原簿である。これは、一部は刊行されたものの、残りはその存在すら知られていなかったので、ペルーの近現代の社会・文化状況を知る上で学術的に貴重な発見といえる。本研究のテーマは、1960 年代以降の農村の変化であるが、それ以前の状況が再構成できれば、その動態のあり方をよりいっそう詳細に分析できることになり、また、これまでほとんど状況の分かっていない地方のアシエンダの実態を記したものなので、ペルー近現代史の分野にとっても大きな意味をもつものである。もう 1 つの発見は、クスコ市における民衆聖人像がこの 60 年間に信者から奉納された衣装すべてである。この衣装の発見は、その色、文様、大きさ等を分析することで、民衆カトリックのあり様を逐一遡ることができるものであり、それは、クスコに限らず、ペルーの他の地域でのカトリックの状況を考えるための仮説を検討するために大きな意味を持つと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 眞鍋周三
「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察―ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて―（その 1)」査読有、兵庫県立大学 80 周年記念論文集、2010、pp. 50-70。

② 眞鍋周三
「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察―ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて―（その 2)」『人文論集』、査読有、第 45 巻，兵庫県立大学、2010 年。pp. 1-24。

③ 加藤隆浩
「アンデス先住民が見た馬―未知から既知へ」(2)『南山大学人類学博物館紀要』査読無、第 28 号、2010、pp. 46-57。

④ 加藤隆浩
「アンデス先住民が見た馬―未知から既知へ」（１）『南山大学人類学博物館紀要』査読無、第 27 号、2009、pp. 35-46。

⑤ 眞鍋周三
「ペルー・シエラ南部プーノ県の社会経済的変化の研究―南米ラクダ科家畜をめぐる諸問題を中心に―」『人文論集』、査読有、第 44 巻，第 1・2 号，兵庫県立大学、2009、pp. 1～40。

⑥ Alejandro Ortiz

"El contrapunto", *Perspectivas Latinoamerica*nas, 査読有, Año 6, 2009, pp.122-140.

⑦ Luis Millones
"Perfomance y bienestar en la medicina tradicional peruana", *Perspectivas Latinoamericanas*, 査読有、Año 5, 2008, pp.1-10.

⑧ Wilfredo Kapsoli
"La muerte del Inca en el imaginario andino", *Perspectivas Latinoamerica*nas, 査読有、Año 5, 2008, pp.20-40.

〔学会発表〕(計 6 件)

① 眞鍋周三
「ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察」日本ラテンアメリカ学会西日本研究部会、2010 年 1 月、京都大学。

② 眞鍋周三
「ペルー・中央セルバの歴史研究の重要性」日本ペルー民族学研究 50 周年記念フォーラム：日本とペルーの媒介者たち、2009 年 10 月、南山大学（名古屋市)。

③ 藤井龍彦
「その後のコトシュ遺跡」日本ペルー民族学研究 50 周年記念フォーラム:日本とペルーの媒介者たち、2009 年 10 月、南山大学（名古屋市)。

④ Kato Takahiro
"Equinofobia de los indigenas recien conquistados", Mestizo Renaissance: 400 years of the Royal Commentaries,2009 年 4 月 10 日, Tufts University (Medford, U.S.A.).

⑤ 眞鍋周三
「ペルー・シエラ南部プーノ県の社会経済的変化の研究―南米ラクダ科家畜をめぐる諸問題を中心に―」日本ラテンアメリカ学会西日本研究部会、2009 年 1 月、神戸大学。

⑥ Kato Takahiro
"El pobre más rico y su sentido social en el Siglo XVIII", VIII Jornada de estudio sobre pensamientocultura y sociedad coloniales, 2008 年 9 月 7 日, Pontificia Universidad Católica del Perú (Lima, Perú).

〔図書〕(計 4 件)

① Kato Takahiro
"La equinofobia de los indigenas recien conquistados", *Mestizo Renaissance: 400years of the Royal Commentaries*, Universidad de Sevilla, 2010, pp.150-170.

② 加藤隆浩
「食文化」『ラテンアメリカの民衆文化』行路社、2009、pp.269－291。

③ 加藤隆浩
「中央アンデス世界の二つの冥界」『説話・伝承の脱領域』岩田書院、2008、pp.431-450。

④ Luis Millones
Taki Onqoy: De la enfermedad del canto a la epidemia, Centro de Investigaciones Diego Barros Arana, 2007, p.403。

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　隆浩（KATO TAKAHIRO)
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：50185849

(3)連携研究者

高橋　博幸（TAKAHASHI　HIROYUKI)
立命館大学・経営学部・教授
研究者番号：00249666

眞鍋　周三（MANABE　SHUZO)
兵庫県立大学・経済学部・教授
研究者番号：70275303

(4)研究協力者

友枝啓泰（TOMOEDA　HIROYASU)
国立民族学博物館名誉教授

藤井龍彦（FUJII　TATSUHIKO)
国立民族学博物館名誉教授

Luis Millones
Profesor principal, Universidad Nacional San Marcos.

Alejandro Ortiz
Profesor, Pontificia Universidad Católica del Perú

Wilfredo Kapsoli
Profesor, Universidad de Ricardo Palma

Juan Solano
Ex-profesor Univesidad Nacional del Centro del Perú